
Black night

珊瑚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black night

【Nコード】

N9073V

【作者名】

珊瑚

【あらすじ】

橙色の髪を持った少女。

彼女は幼い頃から蔑まれ、罵られて来た。

しかしそんな少女を助けたのは一人の青年。

少女の心を溶かしたのは二人の少年。

少女と少年たちが織り成す物語が

今、始まる。

第零章「過去」

あるところに、橙色の髪を持った美しい少女が居ました。

少女は独りぼっちでした。

だけどある日。

少女に一人の少年が手を差し出しました。

少女は少年の手を取りました。

するとどうでしょう。

真っ暗だった少女の世界には、光が溢れたのです。

少女は少年の妹になりました。

少女は少年の母親の娘になりました。

少女は、幸せでした。

幸せな日々が続いたある日。

少年が強くなるために修行に出て行きました。

残された少女は母親を守るために、少女もまた修行を始めました。

そのうち、少女には二人の友達が出来ました。

少女の友達は、二人とも少年でした。

少女はもっともつと幸せでした。

もっともつと幸せな日々が続いたある日。

少女は家に居ませんでした。

そんな少女の家にある男が入ってきました。

男は少女の母親を殺してしまいました。

少女は悲しみに明け暮れました。

そして戦うことを決意しました。

化け物だと恐れられても
人殺しだと罵られても構わない。

少女の心には、復讐心が生まれました。

ある日、少女はある情報を手にしました。

少女の母親を殺したのは、ある組織のボスだと言っのです。

少女はその組織を深く恨みました

自分を認めてくれた人が殺されたのがとても辛かったです

まるで自分を再び否定されたような気がしてならなかったのです

少女は歩き出します。

色が変わる右目に眼帯を着け
不思議な力を携えて、歩き出します。

歩いた先には何があるのか。

少女はわかりません。

でも少女は歩き出しました。

二人の仲間と共に……。

第零章 「過去」

第壹章「始動」

走り出せ。

地面を蹴り
岩を砕いて
壁を破いて

己を壊す覚悟で。

野望を果たすまで。

母さんの仇、必ずとってみせる。

第壹章 始動

――・・・

ある小さな墓地の前に、少女・・・舞姫は居た。

彼女の視線の先にある墓石には”黒輝家”と乱暴に刻まれている。

「ごめんね、母さん・・・出て行くまでにちゃんとした墓石作ってやれなくて」

舞姫は手を合わせて、呟く。

彼女の唯一の家族だった母は3年前何者かに殺害された。

警察が捜査しているらしいが未だ表立った情報は耳にしていない。

だが、舞姫には一つの手がかりが合った。

母が殺される前、近所で聞いた噂。昔解散したはずの裏組織がまた動き出したという話だった。

だがその組織は昔に一度解散していて、解散をした時に一番上に居た人間は死んだと聞いていた。

多分、また新しい人間が上に来たのだろう。

母は優しい人だった。

いつも笑っていて笑みを絶やすことは無かった。

舞姫は出かけた涙をぐつと堪える。

—もう泣かないと決めたんだから。

手を握り締め、舞姫は立ち上がった。

きつと今この場に母が居たのなら、彼女を止めただろう。
そんなことしなくてもいいと。

だが母はいない。いないなら居ないで耐えられないのは舞姫の方だった。

「母さん、ごめんね。行つて来ます」

舞姫は墓石にそつと触れると、歩き出した。

「舞ー！」

「舞姉ー！」

墓地の入り口に2人の少年が姿を現した。
大きく手を振っている。

そんな彼らを見つけた舞姫は駆け出した。

．．．

「舞……本当にいいのか？」

舞姫の隣を歩く少年、龍弥が問いかける。

「ああ、迷いは無い。俺よりお前らこそいいのか？相手は国際規模の大組織だぞ？」

「所詮はクズの寄せ集めでしょ。満足に訓練もしていない奴等に僕等が負けるわけ無いよ」

舞姫の言葉に、もう一人の少年……拓人がニヤリと微笑みながら言う。

すると舞姫もふわりと微笑み、ぐっと手を握り締めた。

「さて……行くとするか」

舞姫達は暗い森を歩いていた。

住んでいた街を出てから既に8時間は経過している。
だが3人は止まることなく歩き続けた。

「なあ、そろそろ休まないか？暗くなってきたし」

そんな中、龍弥が長い黒髪をかき上げながら提案した。

すると舞姫も足を止め、辺りを見渡した。

「そうだな・・・あまり動き回っても体力が消耗するだけだし。それに、ここには木の実が多い。野宿には最適だろう」

「舞姉、コレ食べれるかなあ？」

足を止めた拓人が持つてきたのは、何かよく分からない生き物。

「せめてどんぐりとか木の実系持つてきて欲しかったな」

龍弥は、生きているのか死んでいるのかわからない生物に思わず嘔吐しそうになった。

自分の胸を擦り、深呼吸をする。

「・・・流石に俺は食えないな」

「お腹壊す？」

「うん。それはとりあえずやめとけ」

舞姫が拓人の手から生き物を受け取り、遙か彼方までぶん投げた。

「うきゃー」と悲鳴が聞こえたのは気のせいだろう。

その後、適当な果物や木の実を見つけ出して食べた。

少し落ち着いてから舞姫はすっと立ち上がる。

「さて・・・と。湖でも探してくるか」

「ん？何で？」

「流石に水浴びくらいしたいだろ？」

「あー・・・まあ、ね」

舞姫は龍弥と拓人に待っているよう伝えた。

「見つけたら浴びてくるから、少し遅くなるかも知れない」

「りょーかい。何かあったら叫べよ」

「まあ、危なくなったらな」

「いつてらっしゃーい！」

舞姫はフードを深く被ると、森の奥へと入っていった。

・・・

龍弥達と別れた後少し歩くと、舞姫は大きな湖を見つけた。

そっと近付いて水に手を触れてみる。
少し冷たいが入れない温度では無い。

舞姫は試しにブーツを脱ぎ、足を入れてみた。

「・・・気持ちいい」

キツチリ着込んでいた為、少し暑かったのだ。

ひんやりと冷たい水は少し火照っていた体をそっと冷やしてくれた。

数分だけ気持ち良さに目を瞑った後、服の帯をシュルツと外す。そして上に着ていたワンピースも脱いで下着だけになる。

そのまま湖へ足を踏み入れ、座った。すると胸辺りまで体が水に浸かる。

「はぁ・・・」

ひんやりとした心地良さにもう一度目を瞑る。

少し浸かった後に、水から上がり、着てきたフードで体を拭いた。

「・・・タオル持ってくればよかったかな」

持ち物はなるべく必要最低限のモノだけと心がけたのだが、やはり無いと不便なものが多い。

濡れた髪を手ぐしでいじりながら、舞姫は微笑んだ。

「随分と、便利な生活を送っていたんだな」

今まで当たり前に使っていたものが、いざ無いとなつてここまで困ると思わなかった。

その時、舞姫は頬に少し風を感じ、空を見上げた。

月が綺麗だった。

「すごい・・・」

周りで光る星も十分輝かしいが、月はその何倍も美しく光を放っていた。まるで民衆に囲まれる王女のような。

「少し、冷えてきたな」

舞姫は月から視線を外し、素早く服を着た。

そして龍弥と拓人が待つているであろう場所へ歩き出した。

輝き続ける月の光を背中に浴びながら・・・。

第壹章「始動」(後書き)

主人公は女の子です
男勝りなだけです

地味に美人設定です↑
ついでに隠れ巨乳設定です(ry

第貳章「戦闘」

戦え、この身が朽ちようとも。

血を浴びて真っ赤に染まったこの手が
落ちたとしても。

死体を踏んで重くなったこの足が
切り落とされたとしても。

目的を果たすまで、

俺は・・・

刀の柄を握り続ける。

第弐章 戦闘

・
・
・
・
・

湖で水浴びをした舞姫は、龍弥と拓人が待っているであろう場所へと帰った。

「・・・?!」

だがその場所に彼らは居なかった。
それどころか荒らされた形跡がある。

——何かあったのか？

舞姫は不安になり、ダツと走り出した。

しかしその時、背後から鋭い視線を感じた。
咄嗟に後ろを向くと、そこにいたのは仮面を被った黒ずくめの（体格からして）男。

「こんなトコに餓鬼が何の用だ？ここら辺は立ち入り禁止だ」

男は手に持った武器をチラつかせて言った。

脅しているつもりだろうか？

「へえ・・・で、その立ち入り禁止の区域にいるっつーことは・・・
アンタあそこの従業員か何か？」

舞姫はニヤリと笑みを浮かべ、森の奥にある古い屋敷のような建物を親指で指した。

今の所、1番最初のターゲットがあそこだ。

ここからあの建物はかなりの距離がある。
きつと近く見えるのはあの建物があまりに大きいからだろう。

「餓鬼には関係ない。さっさと帰って寝な」

「ふうん・・・ビンゴ？」

まるで挑発するかのように一層笑みを深くする舞姫に、男は怒りを露わにした。

「餓鬼め・・・あまりナメてると痛い目見るぞ」

しかし舞姫は笑みを絶やさずに言った。

「痛い目・・・見させてみるよ、オッサン」

その言葉が引き金になったのか男は刃物を構え、舞姫に突っ込んでいく。

しかし彼女はそんな男の攻撃を易々とかわし、横へ回り込むと脇腹へ拳を叩き込んだ。

「ぐっ?!」

「遅いよ」

それからすらりとした足を振り上げると、男に鋭い回し蹴りを喰らわせた。

か弱そうな少女からは想像もできない攻撃力に、男は成す術も無く吹っ飛ばされる。

舞姫は苦しそうに呻き声を上げて座り込む男に近付く。

そして刀を鞘から抜き、男の首筋に当てた。

「この辺で長い黒髪と緑髪の人見てないか？」

「・・・あのガキ共なら、今頃俺の仲間に囲まれてるぜ」

それを聞いた舞姫は少しだけ目を見開くが、すぐに表情を戻し、踵を返した。

しかしそれを男が見逃すはずが無い。

男は懷から素早く銃を取り出すと、背を向けて歩き出した舞姫に向けた。

カチャリとセーフティを外す音が聞こえる。

「・・・しつこい奴は嫌いだ」

次の瞬間、ドシャツと音を立てて男は倒れた。

倒れた男の胸元からはドクドクと鮮血が流れ出る。

「人殺しも、嫌い」

舞姫は寂しげにそう呟き、その場を去った。

――
・
・
・
・
・

一方その頃、龍弥と拓人は・・・。

「キリが無い！」

「どんだけ居るんだよ・・・」

二人はかなりの人数・・・しかも大人に、苦戦を強いられていた。傷すら負っていないものの、今まで倒してきた人数は相当なものだった。

そろそろ体力も限界に近い。

それに比べ、目の前に立つ黒尽くめの男達はまだ元気そうだ。

先程から倒しても同じ人数増えていくため、逃げることもままならなかった。

「俺、もう腕痛い・・・」

「僕も疲れてきたよ」

龍弥は手にした鞭をしならせる。
だが、その動きにはキレが無かった。

拓人も魔方阵を発動させるのが少し遅れてきている。

遅かれ早かれ、勝敗が着いてしまっただろう。

「今がチャンスだ！やれ、者共！」

一気に大人数が駆け込んでくる。

最後の足掻きとばかりに龍弥と拓人は身構えた。

しかしその時、辺りに突然桃色の花びらが舞い始めた。

「これは・・・?!」

「蓮の、花」

龍弥と拓人は辺りを見渡す。

すると月を背中に、大きく跳躍する影が見えた。

影が刀を握った手を横に振ると、花びらが更に増加し、風に翻弄され激しく舞い踊る。

やがてその数は周りが見えなくなるほどになった。

「散れ・・・」

影・・・舞姫の言葉に花びらが反応し、今までゆらゆらと舞っていた花びらは鋭く変形した。

そして辺りに居る黒ずくめの男達を切り裂いていく。

舞姫は宙で一回転すると、スタッと猫のように龍弥達の前に降り立った。

「無事か・・・龍弥、拓人」

「舞！」

「舞姉！」

橙色の髪をなびかせ、舞姫は少しだけ口角を上げた。それから前を見据える。

男達は殆どの者が息絶えていたが、何人かはまだ生きている。

だが大分弱っているため、素手でも倒せるだろう。

「まだ戦えるか？」

「ああ、任せろ」

「舞姉が来たからね。ここは頑張らないと」

3人はもう一度武器を構えると、走り出した。

・
・
・

「二人とも、怪我はしていないか？」

舞姫は近くの木によしかかっている龍弥と拓人へと歩み寄った。二人は肩で息をしている。

「うん、大丈夫だよ」

「少し疲れたけどな・・・」

「じゃあ少し休もう。まだ道のりは長い」

龍弥はふう、とため息を零す。

そんな彼を見つつ、舞姫はぐいっと頬に着いた返り血を乱暴に拭いた。

そして森の奥に聳え立つ大きな屋敷を見上げる。

「まずはあそこを潰すんだよな」

「ああ」

大きすぎる屋敷に、龍弥は冷や汗を垂らす。

「・・・にしても、立ち入り禁止区域にあれだけの巡回者がいるんだ。こりゃ、気合入れなきゃな」

「屋敷の周りだけでこの人数だからね・・・」

拓人も屋敷を見据えながら言った。

それから舞姫はぐつと拳を握り締めた。

「何人居ようと関係ない。ここが組織の一部なら潰すだけだ」

彼女の目からは決意が見て取れた。
だが同時に、泣いているようにも見える。

「舞？・・・何かあった・・・」

龍弥がそう言い掛けた途端。

ドオオンッ！

突然屋敷の方から爆発音が聞こえた。

何事かと音の方へ目を向けると、先程まで眺めていた屋敷の一部が燃えていた。

何かが爆発したのか・・・それとも爆弾か何かが投げ込まれたのか。

「っ・・・行くぞ！」

「おう！」

「面倒だなあ、もう！」

舞姫達は屋敷へ向かって走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9073v/>

Black night

2011年10月9日14時58分発行